

はじめに

市民連合めぐろ・せたがや運営委員／弁護士 児玉 勇二

第49回衆議院議員総選挙は、改憲勢力が国会を軽く3分の2以上を占めるようになって、市民と野党の共闘を担ってきた市民側にとっては正確な分析が不可欠になっています。

総選挙後の新聞などマスコミは、自民党単独絶対過半数、自公改憲の3分の2確保、維新4倍、国民も増加、改憲勢力3分の2以上となったのに対して立憲野党は、立憲民主、共産党は減少、改憲勢力は3分の2以上、野党共闘は失敗したとの報道が、反共攻撃と立憲の共産との政権構想批判が洪水のように全国を駆け巡りました。しかしながら私は、自分の市民連合の選挙区の東京5区と6区での立憲議員の小選挙区当選のみならず、5区では現大臣を落選させた成功体験から、政権交代はできなかったけれど、マスコミの野党共闘失敗の報道には、落差を痛感させました。野党共闘の政権交代の目的実現には至りませんでした。次の参議院選挙に向けた出発点にはなり得たとの到達点への確信がありました。特にこの小選挙区制のもとでは、巨大与党自民党に勝つにはこの道しかないとの確信を我々市民連合の活動家のみならず、立憲野党の政治家の間では、政党間の距離には一定の考え方の差はあるにしても確信となっていたのでした。

そのなかで私たちいずれも市民連合の活動をしている弁護士3人が中心となって、今年の参議院選挙改憲勢力3分の2割れの勝利と改憲阻止に向けた市民連合の本気の共闘が各地でできあがることに向けた本を出そうではないかの声が起きました。、中央の市民連合の皆さんと、各地の地域市民連合で活躍された皆さんの実践報告、共闘に向けた各政党の皆さんの連帯メッセージ、最後に改憲阻止に向けた活動についてまとめ、今年の参議院選挙に向けた武器となるように昨年暮れから今年のはじめに緊急に書き上げた次第です。

本書はまず巻頭言として、2015の安保法制の強引な立法に反対した「安保法制に反対する学者の会」の広渡清吾先生に、安倍・菅政権の長期にわたる憲法破壊の政治を引き続いた岸田政権に対する徹底的な批判とたたかひのなかから、今後の21世紀の国民が変わりうる新しい市民運動への転換への希望を語ってもらっています。

それを引き続いて第I部として「2021年総選挙での共闘選挙の成果と課題」として、第1章は、市民と野党の共闘を理論的にも発展させてきた「安保法制の廃止と立憲主義の回復を求める市民連合」運営委員の中野晃一さんと私児玉との、本書の基調的対談を載せました。総選挙で市民連合が果たしてきた役割、参議院選挙でも野党共闘は不可欠であること、市民連合の今後の展開、共闘を発展させる鍵は地域での本気の市民連合活動と共闘が必須であることについて対談しています。

第2章では、私の地元地域の市民連合や労働運動、市民運動によって世田谷区長に選ばれた保坂展人氏に、市民と野党の共闘はまだ形成過程にあって未熟であったこと、しかしこれから発展していけるものであること、その条件は何なのか、地方自治を住民の立場で担ってきた首長の立場から、また国会議員の経験からも語ってもらっています。

そして第Ⅱ部として、全国の代表的な地域市民連合の取り組みとして、今回の総選挙とそれまでの歴史を、各地域の代表の人にその実践を語ってもらっています。今回の衆議院選挙での勝利の経験から、本気の共闘の各地の具体的実践こそ、参議院選挙と改憲阻止にも向けた闘いへの教訓がいっぱい詰まっております、今後の各地へのその勝利に向けて、参考となり、その展望が開いていければと考えています。

第3章では今回の総選挙も注目を浴びた新潟の実践を、新潟情報国際大学の佐々木寛教授に語ってもらっています。

第4章では小選挙区で今回8人当選させた東京23区の成果について、「市民と野党をつなぐ会 @東京」共同代表の鈴木国夫氏が、その歴史と今回の衆議院選挙の実践報告をしてもらっています。その後、東京で活躍した衆議院選挙の各区の活動の声です。各区の順番で報告してもらっています。

まず私の地域目黒区・世田谷区の5区と6区です。

5区は目黒区と世田谷区の一部の地域で、立憲民主党東京都連幹事長・手塚仁雄衆院議員が立憲野党の候補者として以前から一本化されていて、まさしく市民と野党の共闘を全面に出した闘いを貫いて現役閣僚の若宮健嗣議員を落選させた区です。

6区は私の地元で、世田谷のその他の地域で、立憲民主党の落合貴之衆員議員が現職です。以前は維新、みんなの党を経由してきた、地域の保守層の方々からも支持の多い地元出身の議員です。5区と同じように、新社会党や生活者ネット、緑の党ら幅広い政治団体も支援した、本気の共闘が組めた結果、前の衆院選挙も今回の選挙も、自民二世議員を破って、小選挙区当選の結果を出せています。

7区は、立憲の長妻明さんの地盤の強いところで、中野区で革新首長を生み出した盤石な闘いがどう組み立てられてきたか学ぶところの多いところでは、全国市民連合の全体会でも広渡さんからも新しい21世紀の国民が変われる市民運動のモデルとして紹介もされていました。

8区はれいわ新選組の山本太郎代表が出馬表明し後に取り下げることになり、長い間準備していた立憲の吉田晴美さんに一本化されて、本当に市民と野党の共闘の草の根の民主主義を発揮して、投票率も高くなって、素晴らしいたたかいいをしてマスコミにも注目されました。

9区も自民の菅原一秀氏に切り込んで、新人として立憲の山岸一生さんが勝利した選挙の闘いでした。

第5章は、全国の市民連合の実践でも新潟とともに注目を浴びている福島の子市民と野党の共闘の今回の衆議院選挙についてのまとめです。

第6章は、私たちの本土の市民連合のスタートとなったオール沖縄のたたかいいを紹介しています。

第7章は、総選挙で躍進した維新の会の台頭をどう見るか、大阪で維新政治と対峙してきた関西学院大学の富田宏治教授に寄稿いただきました。

第8章は各政党関係者からの連帯のメッセージを載せています。

第Ⅲ部では参議院選挙で改憲勢力の3分の2阻止に向けて、第9章は国分寺市市民連合の共同代表の梓澤和幸弁護士が改憲に私たちはどうたたかうかについての論考を、第10章では山口県市民連合の共同代表で、安保法制違憲訴訟全国ネットワーク時期代表の内山新一弁護士が、安保法制違憲訴訟のなかで、集団的自衛権行使などが明らかに違憲であること、東北アジアの台湾・朝鮮有事などの米軍の戦争に自衛隊が参加することで国民の人格権や平和的生存権や憲法改正決定権への侵害になること、今までの各地の判決が敗訴となっていますが、勝訴を獲得するためにも「100万人署名」に取り組んでいることを語っています。

あとがきでは梓澤氏に、全体を通して今回の総選挙の市民と野党の共闘勢力の真の総括と今後のたたかひの展望・希望を熱く語ってもらっています。